

当院における OCT guide PCI 時の取り組み

¹華岡青洲記念病院、²華岡青洲記念病院竿崎 佑弥¹、井口 琴音¹、田村 隆始¹、寒河江 磨¹、奥田 正穂¹、平田 和也¹、管家 鉄平²、
華岡 慶一²

＜はじめに＞ OCT はIVUS と比較すると解像度が約 10 倍であり内腔表面の詳細な観察が可能であることや、3D image を利用した分岐部病変に対する詳細な治療が可能であることから当院では約 4 割の PCI で OCT を選択している。しかし、血球排除が必要不可欠であり血球排除不良になると画像が描出することができないことや、3D 画像を評価する際、本幹 wire と側枝 wire が重なってしまうことで wire shadow により 3D 画像での側枝 wire 評価ができず、OCT の取り直しが必要になり撮像回数が増えることで、造影剤使用量の増加などが懸念される。そこで今回当院での OCT guide PCI 時の取り組みについて報告する。＜取り組み＞1.造影剤使用量低減及び鮮明な OCT 画像の描出するための取り組み GC の deep Engage による良好な血球排除の確認 Guide Extension カテーテル使用による血球排除の向上適切な観察位置の検討を行うことによる OCT 撮像時の造影剤使用量の低減 2.3D image に関する取り組み OCT 撮像前の Angio 画像から OCT カテーテルと wire の位置関係の検討を行うことで wire shadow による評価困難画像の回避 3D image をより正確に評価するための 2D 画像との比較 STENT Design を考慮したより適切な治療戦略の考察＜結語＞ OCT guide PCI を行う上で様々な工夫を行うことで、従来よりも造影剤使用量の低減や、正確な画像診断が可能となり、より適切な治療戦略を立てることに寄与できた当院での取り組みと工夫を報告する。